

る。上方左側には木釘状のもの（破損している）が二本打ち込まれている。ここでの表裏、上下の表現は文字を基準にしているが、この板は曲物の一部である可能性が高く、本来は横長のものと考えている。(12)は下部の左右を削り、先を尖らせている。

以上の六点が一九九七年度調査で出土しているが、発掘調査は継続中である。一九九八年度以降の調査では、武家屋敷の住人の姓が墨書された瀬戸皿が出土している。またこの他に明治二〇年前後の遺物を投棄した土坑が数基確認され、文字の書かれた木製品も十数点出土し、年月日、地名、人名などが判読できている。

木簡の釈読については、福井市郷土歴史博物館の足立尚計氏に協力を賜った。また調査地一に関しては、調査を担当した青木元邦氏の協力を得て記述している。

（長谷川健二）

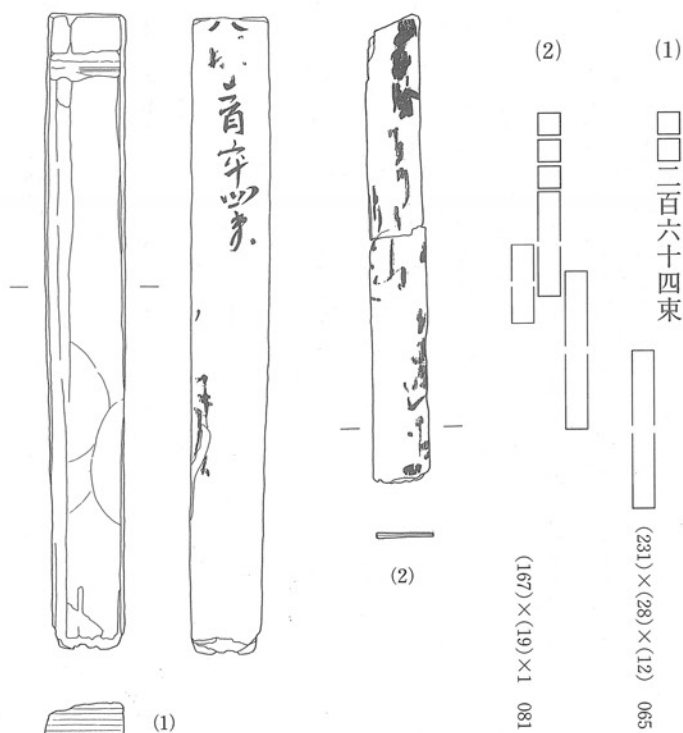
石川・^{かみ}神野遺跡

- 1 所在地 石川県金沢市神野町西地内
- 2 調査期間 一九九七年（平9）五月～十二月
- 3 発掘機関 金沢市教育委員会
- 4 調査担当者 久保有希子・新出敬子
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代後期、古墳時代前期、古代（八～九世紀）
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（金沢）

本遺跡は金沢市の西方、犀川西岸の沖積平野に位置する。基本的に古代の遺跡であるが、部分的に弥生・古墳時代の遺構・遺物も確認できる。木簡が出土した遺構は、九世紀中頃～後半にかけての遺物が出土する幅二～三m深さ平均〇・八mの南北方向に流れる溝SD〇三である。溝の方向が南北の方位に乗ることから、何らかの区画の意味を持つ溝の可能性も想定でき



るが、週辺からその他の目立った遺構が検出されていないため、はっきりとした性格は不明と言わざるをえない。SD〇三からはその他、「松」「綱長」などと記した墨書土器や木製人形などの木製品が出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1)は上端がキリ・オリ、下端がオリ、左右がサキにて加工されている。木簡の上・左端の文字が切られているから、少なくともその方向は二次的に加工されたものである。木簡として使用された後に、何らかの木製品として転用された可能性が高い。また、裏面には横方向に切り込みが入っているが、それが木簡として機能している当時のものか、二次的なものかは判断できない。

表面には、不明二字に続き「二百六十四束」の字が書かれている。稲の数量を記したものと考えられ、出挙に関連する資料である可能性が高い。数人分をまとめて記録していたものであろう。仮に一〇人でまとめたと仮定すると、一人当たりの稲の量は約二六束となる。

「二百六十四束」の左下にも墨痕が認められるが、前述のとおり二次的な加工により欠損し、さらに残存状態も悪いため判読できない。

(2)は上下・左右いずれも二次的なオリにより欠損しており、さらに木簡のほぼ中央で二つに折れている。二行以上の墨書があったものと考えられるが、木簡の遺存状態が非常に悪く、墨痕が確認できるのみであり、釈文やその内容等は全く不明である。(谷口明伸)